岩手最大の被災地に〝復興診療所〟を
〈岩手〉陸前高田診療所所長

伊東紘一さん

陸前高田で生きる人の支えに…
地域医療を説いたその身を捧ぐことを決断

NEWSな済生人 Interview

死者・行方不明者1808人。岩手県陸前高田市は、東日本大震災で同県内の自治体で最大の被害を受けた。復興を医療から支えようと立ちあがったのは元〈茨城〉常陸大宮済生会病院・伊東名誉院長。地元の要望に応え、計画を前倒しし、平成27年10月に仮設診療所を開設した。陸前高田にかける思いとは。

（埼玉・川口総合病院
済生記者　小川真由美）

――仮設診療所が開設して1カ月。いかがですか。

伊東　10月1～31日で237人が受診しました。毎週金曜日の整形外科の診療日は、受診者が多く、待合室の椅子が足りなくなることもあります。

開院2日目の金曜日には、山形済生病院・濱崎允院長に同院のスタッフを引き連れて支援に来ていただき、診療のみならず、放射線検査等についても指導していただきました。

――東日本の済生会病院からも。

伊東　毎週交代で8病院（山形、宇都宮、前橋、川口、習志野、中央、横浜市東部、横浜市南部）の先生方に来ていただきます。さらに、私の学生時代からの友人である古矢整形外科医院（神奈川県川崎市）・古矢仁院長も月に1回、診療支援に来てくれています。

――印象的なことはありましたか。

伊東　初日、5人の受診者の中に白血病の人がいました。「最近疲れる」と言って訪れたので診察すると、貧血で、脾腫（ひしゅ）がありました。熱はないため血液疾患を疑い、採血し、所内でただちに検査したところ、白血病であることは確定的でした。しかし、骨髄穿刺針がないため正確な診断をできず、今後の治療もあるので、患者さんに告知して近くにある県立大船渡病院の血液内科に紹介しました。

その後すぐに、診療所でも骨髄穿刺ができるよう、染色液や骨髄穿刺針をそろえました。

――患者さんは告知されてショックを受けたのでは。

伊東　私が告げた時は冷静でしたが、診察室の外では看護師さんに「白血病だって」と言って驚いていたようです。しかし私は、最初に告知して、患者さんがしっかりと治療に取り組むことが大切だと考えています。

――他の医療機関にはかかっていなかったのでしょうか。

伊東　「病院なんか嫌いだ」と行く気はなかったそうです。そうした折、診療所が出来たからということで来所しました。もし開院していなかったら、受診せずに、どこかで倒れていたかもしれません。この人が受診しただけでも、10月1日に開院した意義があったと思いました。

――その人にとっても大きな一日でしたね。その後はいかがですか。

伊東　大船渡病院には無菌室がありますので、そちらで治療を続けています。

この患者さんは一つの象徴です。陸前高田に済生会が来た価値があったのだと強く思いました。

――ほかにはどのようなことが。

伊東　整形外科医が帰った土曜日の午前中、肘関節の疼痛腫脹がある人が受診しました。「昨日なら整形外科医がいたのに」と思いつつも、検査をすると痛風。薬と痛み止めを関節内投与したところ、午後には楽になったそうです。そんな、「整形外科医はいなくても、私も役に立つな」と思った症例もありました（笑）。

今後の問題は、被災者の精神的なケアです。心療内科の必要性が高まると予想されますので、今後の診療体制について支援が必要であると考えているところです。

世の中の「武器」を使えば正確な診断に早く到達できる

――すぐに検査したり機器をそろえたりと、自治医科大学で臨床検査医学教授を務めた伊東先生らしさがでている診療所ですね。

伊東　正確な診断に早く到達することが重要だと考えているからです。

昔は、「名医」は長い年月の経験が豊富な医師であるとされました。積み重ねがあるから、昔の研修医はベテランの医師にかなわないとされました。しかし、今は変わったのです。CTやエコー、血液・生化学検査など、世の中にある「武器」を使って正確な診断に早く到達すれば、今の研修医は昔の「名医」に対抗できるのです。

診療初日に来院した白血病の患者
この人を見つけただけでも
診療所を開設した価値があった

診療開始の10月1日に行われた初スタッフミーティング

インタ□ ュー201512-i07.indd 6-7
15/11/25 18:53

NEWSな済生人 Interview

「棺桶に入る前日まで医者として働く」
20年間は続け、この先を見届けたい

診療所本設地では約4メートルのかさ上げが終わった。山を削り出して盛り土用の土を運んだベルトコンベアは、9月に役目を終え、解体作業が進んでいる。

――若い人に期待しているのですね。

伊東　若い時の経験は将来、必ず役に立つ。だから、いろいろなことをやってほしいのです。私も、若い頃は山梨県の山村や岩手県の海岸でへき地医療に従事するなど、いろいろなことをしてきました。

被災地であるこの診療所にも3カ月でも半年交代ででも、手伝ってくれる人が出てくるといいですね。

――日本では高齢化が進んでいますが、それに伴った意識の変化も必要でしょうか。

伊東　日本の医療は今後、在宅診療をやらなければなりません。診療所や病院で座っていて「来たら診てやるぞ」と言うのでは世の中の先が見えていないと言わざるを得ません。病院や診療所に来ることが困難な老人には、診療に行ってあげないといけないのです。

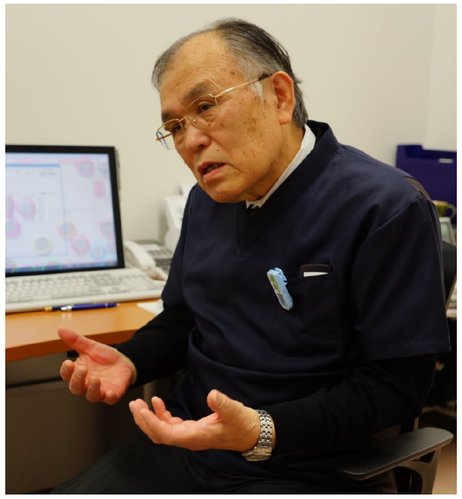
――診療所の計画にも在宅診療が入っていますね。

伊東　今は診断機器も進歩しています。車でも、鞄でも持っていくことができます。在宅の場で結論を出し、「こんな状態だから、こんな治療をしようね」と話すことができます。そうしたことができる診療所として全国のモデルにしたいのです。

――力強いお言葉です。

伊東　今74ですが、まだ20年間は働くつもりですからね（笑）。この先を見届けないといけません。

「棺桶（かんおけ）に入る前日まで医者として働く」のが私の理想です。だから、世の中のすべての人達にも死ぬ前日まで働けと言いたい。特に、この地域の人達には「病気があっても、診療所で面倒を見て、相談に乗って、最期は看取るから、安心して働きなさい」と言いたいです。



震災後、800人の遺体を見た「避難所の人達の今後は？」

――陸前高田に来た経緯を聞かせてください。

伊東　妻の出身地であるため、震災では妻の母や弟、親戚が大勢犠牲になり、一緒に捜索に来ました。捜索に当たるかたわら遺体安置所で身元確認に当たりました。無残な約800人の遺体を見ましたが、その間、避難所の人達の診察にも当たりました。

――犠牲者の半数近くを見たわけですね。

伊東　医師である私でも、あまりにも無残な遺体には暗澹（あんたん）たる思いでした。身内を捜す住民を見ていて、「死んだ人達もつらかったが、生き残った人達もつらい」、そう思いました。避難所にいるのも老人ばかりで、この人達のその後はどうなるのだろうと本当に心配でした。

自治医大で教授を務めた頃、教え子に地域医療に当たる大切さを説いてきました。だからこそ、私も余生をこの地に捧（ささ）げようと決めましました。

――奥様のご家族は……。

伊東　4カ月後に義母は見つかりましたが、義弟や親戚の多くは今も行方不明です。

――奥様も診療所にいらっしゃいますが、とても気丈な方ですね。日頃から診療所に？

伊東　ほとんど毎日顔を出していて、患者さんの話し相手になっています。患者さんは「ここの待合室は楽しいサロンだ」と言って、診療までの待ち時間を感じないでいてくれてありがたいですね（笑）。

いわゆるボランティアと言うのでしょうが、私は「コンシェルジュ（相談役）」だと思っています。

――本設の診療所は平成28年12月に開所予定です。どのような方針を考えていますか。

伊東　診療所を中心に町が出来るようにします。「診療所が出来たら戻ってくる」と言っている被災者はいます。

敷地内には、例えば畑を作れればと考えています。利用者がそれで稼げたら自分の小遣いにできる、そんな仕組みを作りたいです。

というのも、地域包括ケアを目指しているからです。医療や介護が中心ですが、それだけでは不十分で、「生活」をケアしてこそのものです。「生活」というのは、住む家があり、生きがいがあり、コミュニケーションができて笑いがあり、そして、仕事があることです。この地域包括ケアシステムの仕組みを成功させて、日本中に広めたいです。

――ありがとうございました。陸前高田の復興に向けて私もお手伝いできればと思います。

【取材を終えて】

以前、伊東先生が作成した、被災後間もなくの陸前高田を説明した資料を拝見しました。写真には、水が引いた家屋に横たわる遺体、多くの遺体の中から知人を捜す人。報道はされなかった生々しい現実が写されていました。

医療・介護の提供だけでなく、敷地内に畑を作り、病気でも元気な高齢者が少しでもお小遣いを稼げる診療所を目指すという熱い思いを伺い、患者さんの生きがい、そして幸せにつながる診療所の未来が見えました。

〝復興診療所〟には高松宮記念基金が使われています。済生会の一員として、わずかでも役に立てていることをうれしく思うとともに、「人のためにあと20年は働く」と笑顔でおっしゃった先生に、私まで元気をいただきました。

（小川真由美）

伊東夫妻と小川記者（左）

インタ□ュー201512-i07.indd 8-9 15/11/25 18:53